

和辻哲郎

人類の教師

人類の教師

釈迦、孔子、ソクラテス、イエスの四人を挙げて世界の四聖と呼ぶことは、大分前から行われている。多分明治時代の学者が云い出したことであろうと思うが、その考証はここでは必要でない。とにかくこの四聖という考には、西洋にのみ偏らずに世界の文化を広く見渡すという態度が含まれている。印度文化を釈迦で、シナ文化を孔子で、ギリシア文化をソクラテスで、またヨーロッパを征服したユダヤ文化をイエスで代表させ、そうしてこれらに等しく高い価値を認めようというのである。では

どうしてこれらの人物が、それぞれの大きい文化潮流を代表し得るのであるのか。どの文化潮流も非常に豊富な内容を持っているのであって、一人の人物が代表し得るような単純なものではない筈である。しかも人がこれらの人物をそれぞれの文化潮流の代表者として選び、そうしてまた他の人々がそれを適切として感ずるのは、何によるのであるのか。自分はそれを、これらの人物が『人類の教師』であつたという点に見出し得ると思う。

この答は一見したところ矛盾に見えるかも知れない。何故^{なぜ}ならこれらの人物はそれぞれ異つた文化潮流の代表

者とせられるのであるから、それぞれその文化潮流の特異性を表現していなくてはならない、然しかるにその代表者たる所以ゆえんは人類の教師たるにあつてその特異性の表現にあるとはせられないのだからである。しかしこれは決して矛盾ではない。それを矛盾と感ずるのは、いかなる特殊な文化にも彩られない普遍的な人類の教師とか、全然普遍的な意義を担になわない特殊な文化とかいう如き抽象的な想定に囚われているからである。現実の歴史に於ては、いずれかの文化の伝統によつて厳密に限定せられているのでない人類の教師などというものは、曾かつて現われたこ

ともないし、また現われることも出来ないであろう。また普遍的な意義を現わすが故にまさに文化として存立するのだということの云えないような特殊の文化などというものも、曾て形成せられたことはないし、また形成せられ得ないであろう。最も特殊的なるものが最も普遍的な意義価値を有するということは、何も芸術の作品に限ったことではない。人類の教師に於てもそうである。

我々はここに人類の教師という言葉を用いるが、それによって『人類』という一つの統一的な社会を容認しているのではない。現代のように世界交通の活潑となった

時代に於てさえ、地上の人々がことごと悉く一つの統一に結び
 ついてゐるといふ如き状態からは遙かに遠い。況いわんや如
 上の四聖が出現した時代にあつては、彼らの眼中にある
 人々は地上の人々全体のうちのほんの一部分であつた。
 孔子が教化しようとしたのは黄河下流の、日本の半分ほ
 どの地域の人々であり、釈迦が法を説いて聞かせたのも
 ガンジス河中流の狭い地域の人々に過ぎぬ。ソクラテス
 に至つてはアテナイ市民のみが相手であり、イエスの活
 動範囲の如きは縦四十里横二十里の小地方である。がそ
 れにも拘かかわらず我々は彼らを人類の教師と呼ぶ。その場

合の人類は、地上に住む人々の全体を意味するのでもなければ、また人という生物の一類を指すのでもない。更にまた『閉じた社会』としての人倫社会に対立させられた意味での『開いた社会』を指すのでもない。それぞれの小さい人倫的組織を内容とせずには人類の生活はあり得ないのである。実際に於ても人類の教師の説くところは主として人倫の道や法であつて、人倫社会の外なる境地の消息ではなかつた。彼らが人類の教師であるのは、何時如何なる社会の人々であつても、彼らから教えを受けることが出来るからである。事実上彼らの教えた人々

が狭く限局せられているに拘らず、可能的にはあらゆる人に教え得るというところに、人類の教師としての資格が見出される。従つてこの場合の『人類』は事実上の何かを指すのではなくして、地方的歴史的に可能なるあらゆる人々を指すに他ならない。だから人類は事実ではなくして『理念』だと云われるのである。

人類の教師の持つ右の如き普遍性は、その教師の人格や智慧ちえに基く、と通例は考えられる。もしそうであるならば、これらの教師の活動を目前に見た人々の内には、直ちにそれを人類の教師として洞察し得る人もあつて然

るべきである。だからこれらの教師の伝記を語る人々は、これらの教師が周囲から認められず、迫害や侮蔑を受けている最中にも、既にこれらを人類の教師として承認している少数者を描くのである。然し少数者のみがそれをしてその教師として認め、大衆がそれを認めない時に、果してその教師は人類の教師であり得るであろうか。何時いつ如何なる社会にも、少数の狂信者に取り巻かれた教師というものは存在するのである。目前の我々の社会に於てもその例は数多く挙げることが出来るであろう。それらは世界の歴史に於ては幾千幾万となく現われ、そうして泡

沫の如く消えて行つた。だから少数者の洞察などというものも、当にならない方が多いのである。

では大衆が直ちに目前の教師の人格や智慧を礼讃し始めた時はどうであるか。その場合には生前からして既に人類の教師となる筈ではないか。然るに事實はそうではないのである。大衆は必ずしも優れたもののみを礼讃しはしない。天才と呼ばれている人々が生前に大衆の歓迎を受けたという例はむしろ稀まれである。況んや人類の教師とも云わるべき人々がその時代の大衆に認められたなどという例は全然ない。人類の教師たり得るような智慧の

深さや人格の偉大さは、大衆の眼につき易いものではないのである。大衆の礼讃によって生前からその偉大さを確立した人々は、人類の教師ではなくして、むしろ『英雄』と呼ばれるべきものであろう。勿論この場合にも大衆の礼讃した人々が悉く英雄となるのではない。大衆はしばしば案山子かかしをも礼讃する。然し生前既に大衆の礼讃を獲得し得なかったような英雄もまた存しないのである。この点に於て人類の教師と英雄とは明白に相違する。人類の教師であると否とは同時代の大衆の承認によって定まるのではない。

では人類の教師が人類の教師として認められるに至るのはいかなる経路によるのであろうか。云いかえれば、人類の教師はいかにしてその普遍性を獲得したのであろうか。

通例伝記者の語るところによれば、人類の教師は皆好き弟子を持った。その中には十哲とか、十大弟子とか、十二使徒とかと呼ばれるような優れた人物があった。そうしてそれらの弟子は、その師が真に道の体得者であり、仁者であり、覚者であることを信じ切っていた。同時代の大衆が如何にその師を迫害し侮蔑しようとも、この信

頼は決して揺がなかつた。がこれだけならば前に云つた
 ような狂信者に取巻かれた教師と異るところがない。大
 切なのはこれから先である。師が毒杯とか十字架とかに
 よつて死刑に処せられた後に、或は生涯用いられること
 なく親しい二三の弟子の手に死ぬことに満足した（論語、子
 罕十二）
 後に、弟子たちはその師の道や真理を宣伝することに努
 力した。この努力がたちま忽ちたちまに開花し結実したのはソクラ
 テスの場合である。弟子プラトンと孫弟子アリストテレ
 スとは、師の仕事を迅速に完成して西洋思想の源流を作
 った。これらの偉大な弟子の仕事が人々に承認せられれ

ば、その弟子の仕事の中にその魂として生きていくソクラテスが、一層偉大な教師として承認せられない筈はないのである。他の場合には弟子たちの努力は一世代や二世代では尽きなかった。現在残っている最古の資料は、いずれも孫弟子の手になったものと考えられる。釈迦については阿あごん含經典の最も古い層がそうである。イエスについてはパウロの書翰も福音書もそうである。孔子に關しても同様のことが云えるであろう。論語は孫弟子の記録よりも古いものを含んではいない。そうして孫弟子たちは皆更にその弟子たちを教えるためにこれらの記録を

作つたのである。だから最古の記録によつてこれらの教師に接しようとするものでも、曾孫弟子の立場より先に出ることは出来ない。このことは教師たちの人格と思想とが、時の試練に堪え、幾世代もを通じて働き続けたことを意味するのである。しかも彼らは働き続ける程ますます感化力を増大した。たといその生前に僅かの人々をしか感化することが出来なかつたとしても、時の経つにつれてその感化を受ける人々の数は殖えて行く。従つて同時代の大衆を動かす得なかつた教師たちも、歴史的には遙かに多く広汎な大衆を動かすこととなるのである。

かくして彼らは偉大な教師としての動くことのない承認を得て来た。

がこれらの偉大な教師が人類の教師としての普遍性を得るためには、更にもう一つ重大な契機を必要とする。それはこれらの偉大な教師を生んだ文化が、一つの全体として後から来る文化の模範となり教育者となるということである。それは逆に云えば、これらの古い文化が、その偉大な教師を生み出すと共にその絶頂に達して一先ず完結してしまったということを意味する。ソクラテス

を生んだギリシアの文化は、彼の弟子と孫弟子とがこの師の偉大さをはつきりと築き上げた頃に、既にその終幕に達した。そのあとにはこのギリシア文化を世界に伝播する時代、即ちヘレニスト的時代が続き、次でこの文化の教育の下に新しいローマの文化が形成されてくる。それが東方の宗教に打ち克かたれた後にも、基督キリストの教会内の哲学的な思索は、ソクラテスの弟子と孫弟子の指導の下にあつた。更にこの東方の宗教の専制を打破った近代のヨーロッパに於ては、哲学の模範がソクラテスの弟子と孫弟子とに認められたのみでなく、この新しい文化の魂

がギリシア文化の再生にあるとさえも考えられた。このような事情の下に、アテナイの偉大な教師であったソクラテスが、人類の教師としての普遍性を得て来たのである。同様にまたイエスを生んだユダヤの文化も、パウロがその神学を築き上げた頃には、ローマの世界帝国の中に影を没してしまった。それは影は没しつつも決してその存在を失わない不思議な文化ではあるが、しかし旧約のさまざまな文芸を作りつつあった時代、またとにもかくにも死海のほとりにその本拠を持っていた時代に比べると、パウロ以後のユダヤ文化は既に完結して旧約の中

に保存せられたものという趣を呈して来るのである。しかもこのユダヤの文化はイエスの福音と結びついてローマ帝国を征服した。更に中世に至ればヨーロッパ全体を征服した。そうしてヨーロッパの諸民族にその背負っている伝統を捨てさせ、ただ旧約の所伝のみが唯一の正しい人類の歴史であると信じ込ませた。一つの民族の文化が他の民族を教育する場合にこれほど徹底的な感化を与えた例は他には存しないのである。この感化は近代に至ってギリシア文化が再生した後にも容易に衰えない。或はヨーロッパに於て衰えただけを世界の他の諸地方に於

て回復したとも云えるであろう。こういう事情の下にユダヤ人の救世主であつたイエスが人類の救世主としての普遍性を獲得して来たのである。

では釈迦はどうであるか。釈迦を生んだ印度の文化は、彼のあとに一先ずその終幕に達したであろうか。然りと自分は答える。そのためには我々は『印度』が何であるかを反省して見なくてはならない。印度とはギリシアとかローマとかのような国の名或は文化圏の名ではなくして、ヨーロッパという如き地域の名なのである。この地域の内に種々の民族が住み、さまざまの国が興亡し、さ

まざまの文化が形成せられた。釈迦が現われたのは、この印度の地域に西方から侵入したアリアン人が、ガンジスの流域に落ちつき、ヴェダからウパニシヤドまでの文化を形成した後であった。そこには固い四姓制度が行われ、貴族政治による小さい国々が分立していた。釈迦はこの古い文化の伝統に対する革新者として婆羅門バラモンの権威に挑戦し、アトマンの形而上学を斥け、四姓制度の内面的な打破を試みたのである。ここに我々は釈迦を、永い古い文化の云わば否定的な結晶として見出さざるを得ない。果して彼の死後五十年（或は百五十年か）の頃に

は、アレキサンダー大王の影響の下に、印度の地域に曾て作られたことのない大帝国が建設せられた。これは古来武士階級を抑えていた婆羅門の権威の顛覆てんぷくである。印度の社会は釈迦以前と異なるものになったのである。次で北印度にはギリシア人が侵入し、ギリシア風の都市と国とを建設した。更にそのあとにスキタイ人が北から入り込んで、ガンジスの上流にまで及ぶ強大な国を建てた。釈迦に至るまでの古い文化はこれらの時代に一応中断せられたと認めざるを得ない。しかも古い文化の結晶たる釈迦の教は、この新しい国々を教育した。仏教興隆によ

破し、慈悲を政治によつて実現しようとしたものである。更にギリシア人が印度に入ると共に仏教に化せられたことは、有名なミリンダ王経（那先比丘経なせんびくききょう）がこれを証示する。次のスキタイ人が仏教に化せられたことも亦また力ニシカ王の事績を見れば明かである。尤も仏教は、かく新しい国や民族を教化することによつて、自らもまた新しくなつた。大帝国を教化するに當つては、釈迦の時代に思いも及ばなかつた『てんりんじようおう転輪聖王』の理想が作られて

いる。ギリシア人やスキタイ人を教化した際には、曾て印度人の思いも及ばなかつた仏像彫刻が作られ始めた。ヴェダやウパニシヤドに於て、思想を表現するにも抒情詩風の形式をしか用いなかつた印度人が、この時代以来戯曲的構成を持った雄大な仏教經典を作り始めた。かくして仏教の中から潑刺はつらつとした大乘仏教が興り、華麗な芸術と深遠な哲理とを展開したのである。そうしてこの大乘仏教が、印度から北へ出て中央アジアに栄え、更に東してシナに拡がり日本に及んだのである。これらの事情の下に、四姓制度の社会に於ける覺者であつた釈迦が、

人類の覚者としての普遍性を得て来たのである。

然らば最後に孔子はどうであるか。孔子を生んだシナの文化が孔子の後にその幕を閉じたなどとは何人も認め得ないであろう。印度は中世紀以後モハメダンの蹂躪じゆうりんに逢い、仏教は地を払った。仏教の印度は全然の過去である。然しシナに於ては孔子の教は漢に栄え、唐宋に栄え、明清に栄えたではないか、と人は云うかも知れない。然し自分の見るところはそうではない。孔子を生んだ先秦の文化は戦国時代に一先ずその幕を閉じたのである。

ここでも我々は印度と同じく『シナ』が単に地域の名であつて国の名でもなければ民族の名でもないことを銘記しなくてはならない。この地域に於て種々の民族が混融し交代し、種々の国々が相次いで興亡したことは、丁度ヨーロッパに於てギリシア、ローマ和次ぎ、種々の民族が混融し、近代の諸国家が興つたのと、殆んど變るところがない。先秦の文化が伝説にいう周の文化として完成せられ、その末期の春秋時代に至つて反省せられ、次で戦国の時代の混乱と破壊とによつて次の新しい文化に所を譲つたことは、丁度ギリシアがローマに變つたことと

同じ意味に解せられねばならない。戦国時代に於ける夷てき狄との混淆は顕著な事実である。そうして終局に於て大きい統一に成功した秦はトルコ族や蒙古族との混淆の最も著しい国であつた。この統一の事業をうけついで漢もまた異民族との混淆の著しい山西より起つた。即ちここで黄河流域の民族は一新したのである。そうしてその社会構造をも全然新しく作り変えたのである。勿論漢代に於ても先秦の文化は引きつがれている。しかしローマはギリシアを征服することによって文化的には逆にギリシアに征服せられたと云われる。先進の文化が後来の民族

を教化することは、いずこに於ても同じである。同様にローマの文化がギリシア文化の発展段階と見られないように、秦漢の文化もまた先秦の文化の一つの発展段階なのではない。ギリシア文化に教育せられつつローマ文化がローマ文化として形成せられたように、先秦の文化に教育せられつつも秦漢の文化は秦漢の文化として形成せられたのである。この関係を正視すれば、孔子もまた一つの文化の結論として出現したということは、何ら疑を容れないのである。

ヨーロッパに永い間ラテン語が文章語として行われて

いたからと云って、それがローマ文化の一貫した存続を意味するものでないように、古代シナの古典が引き続いて読まれ、古い漢文が引き続いて用いられていたからと云って、直ちに先秦文化や漢文化の一貫した存続を云うことは出来ない。にも拘らず先秦と秦漢と唐宋と明清とが、一つの文化の異つた時代を示すかの如くに考えられるのは、主として『漢字』という不思議な文字の様式に帰因すると考えられる。文字は元来『書かれた言葉』として『話された言葉』に対立するものであるが、かく言葉を視覚形象によって表現するには、直接にその意味を

現わす形象を用いることも出来れば、また意味を現わすに用いられている音声を表示する記号を用いることも出来る。現代世界に最も広く用いられているのはフェニキアに始つた音表記号であつて、一々の文字は単に音を示すに過ぎず。それが相寄つて一定の音の聯関を表示するとき初めてそこに話される言葉の表現が成り立つのである。だから一々の文字が共通であつても、それによつて表現せられる言語は全然異つたものであり得る。のみならずそれは発音に忠実であるために同一の言語を分化せしめる傾向さえも持っている。例えば同じラテン語が地

方によって異った訛りを帯びて来る。それを発音通りに書き記せば、ラテン語と異ったイタリー語やフランス語が成立して来るといふが如きである。がこのような分化の傾向は古き文化の伝統を保持するに不便であるために、先行の文化語の文字的表現をそのまま持続しつつ、一々の文字の音表的作用を変化して行く場合もある。フランス語がラテン語からの由来を保持するためにラテン語の音綴をそのまおんてつま襲用しつつそれによって異った音の聯関を表示し始めた如きがそれである。近世の初めにラテン文からの解放を望んで自国語の文章を書き始めた

時、フランス人はその音声に忠実な綴字ていじを用いようとしたことがあった。がそれは己が文化の根源たるラテン文化から殆んど離別するが如き観を呈した。だからその運動は間もなく逆転して、出来るだけ忠実にラテン語の綴りを保持する運動に変わったのである。テンプス (tempus) とほぼ同じく temps と綴りながら、タンというフランス語を現わすという如きがそれである。だから音綴文字と雖いえいども、必ずしも音声の表示に徹底しているというわけではない。文化の伝統がこの徹底を遮げる。そうして丁度ここに文字の他の様式、即ち直接に意味を現わす形象

が、その独特の生命を保持し得る所以も存するのである。かかる文字の一つの様式としては、フェニキアに近いエジプトに既に古くより象形文字が存していた。がそれはフェニキアの音綴文字に駆逐せられて死滅してしまった。実用的に云って到底フェニキア文字の敵ではなかった。たのであろう。然るに漢字は、もと象形文字に端を発したかも知れないが、やがて象形文字の直観的煩雑性を克服し、半ばは音表文字の作用をも勤めつつ、直接に意味を現わす形象として、異常な発達を示して来たのである。これは一つにはシナの地域に於て文化を作った民族の言

語が単綴語であつたことにも関係するであろう。が最も有力な原因は、文字の本質が視覚形象によつて意味を表現するにあるという点に存すると思う。言語は必ずしも音声によつて表現せられねばならぬのではない。従つて音声を表示する記号のみが文字なのではない。音声の媒介を経ずに直接に意味を現わしても、それは文字としての資格に欠くるところはない。もしかかる形象が使用上に於ても大なる不便なく作り出されるならば、それは文字としてはむしろその本質に忠なるものと云わねばならぬ。漢字は直観性と抽象性との適度なる交錯によつて、

丁度かかる形象として成功したもののなのである。そうして一度かかる文字が成立すると共に、それは音綴文字と甚だしく異った効用を發揮し始める。即ち同一の文字が音声的に異った言語を表現し得るということである。言語が地方的に如何に異った訛りを帯びて来ようとも、文学的表現に於ては常に同一であり得る。また時代的に発音が變遷して行つても、文字は毫ごうも變らないでいることが出来る。かかる漢字の機能の故に、シナの地域に於ける方言の著しい相違や、また時代的な著しい言語の變遷が、かなりの程度まで隠されていると云つてよいのである。

る。現代のシナに於て、もし語られる通りに音表文字を以て現わしたならば、その言語の多様なることは現代のヨーロッパの比ではないであろう。またもしシナの古語が音表文字を以て記されていたならば、先秦や秦漢や唐宋などの言語が現代の言語と異なることは、ギリシア語やラテン語やゲルマン語が現代ヨーロッパ語と異なるに譲らないであろう。然るに漢字はこれら一切の相違を貫いて共通なのである。即ち『書かれた言葉』が地方的時代的に同一なのである。云いかえればシナの地域に於ては二千数百年の間同一の言語が支配した。これは一つの文

化圏の統一を示すものとしては、無視することの出来ない有力なものに見える。ここに我々は先秦の文化や漢文化が一つの文化の異った時代と考えられる窮極の根拠を見出し得ると思う。しかしこのような文字の同一は、漢字という文字の様式に帰因するのであって、必ずしも右の如き緊密な文化圏の統一を示すものではない。フェニキアの音綴文字を襲用した諸文化圏がフェニキア文化の圏内に統一せられていると云えないように、漢字を襲用した我国の文化もシナの文化圏に統一せられているのではない。漢字はその性質上、言語として全然異っている

我国語さえも表現することが出来る。ヤマを山の字によつて、カワを河の字によつて現わすという類である。がかかる事態が直ちに我国の文化とシナの文化との統一を示すのではない。それと同じく文字の同一は、直ちに先秦や、秦漢や、唐宋などの文化の異質性を消すことは出来ないのである。

我々は孔子が人類の教師として普遍性を得て来たことを理解するために、右の事態を正視することが必要であると考える。孔子は先秦の文化の結晶として現われなが

ら、それと質を異にする漢の文化のなかに生きてこれを教化し、更にまたそれと質を異にする唐宋の文化のなかに生きてこれを教化した。勿論漢代に理解せられた孔子と、宋代に理解せられた孔子とは、同一ではない。また漢の儒学はその孔子理解を通じて漢の文化を作ったのであり、宋学もその独特な孔子理解を通じて宋の文化を作ったのである。がこれらの歴史的発展を通じて魯の一夫子孔子は人類の教師としての普遍性を獲得した。この点に於ては他の人類の教師と異るところはないのである。

(昭和十二年十月)

日本文学電子図書館

人類の教師

著 者：和辻哲郎

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系 40
筑摩書房

昭和48年2月20日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館